

[教育実践報告]

「女性学ゼミ」の実験(8)

小 森 治 夫

目 次

はじめに

I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献とビデオ

II. 学生による「女性学ゼミ」の評価

おわりに

はじめに

『商経論叢』第 51 号では、『女性学ゼミ』の実験(7)として、私が本学に赴任して 5 年目と 6 年目に担当した第 I 部の演習について報告した。本稿では、同じく 5 年目と 6 年目に担当した第 II 部の演習について報告したい。ゼミは第 I 部と同様に、「演習 1」(2 年生後期)は従来どおり 2 冊の文献を読み、「演習 2」(3 年生前期)では「ビデオで女性学」をとりいれた。

(第 II 部においては、「演習 1」が 2 年生後期、「演習 2」が 3 年生前期に配置されている。そして、「卒業研究」が 3 年生後期にある。残念ながら、第 I 部の「基礎演習」にあたるものではなく、1 年生と 2 年生前期まではゼミナールが存在しない。教育効果から考えれば、当然、1 年生からゼミを経験させるべきであるが、教員の負担とのかねあいもあり、正規の科目としては実現してい

ない。しかし、2000年度から教員のボランティアと学生の希望者のみという制約はあるが、「自主ゼミ」がスタートしている。ただ、試行錯誤の過程にあり、2001年度も引き続き「自主ゼミ」が実施されるかどうかは未定である。）

I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献とビデオ

私が第Ⅱ部の「女性学ゼミ」でとりあげた2冊の文献は、第Ⅰ部のゼミと同様、井上輝子『女性学への招待』と伊藤公雄『男性学入門』（作品社）であるので、その紹介については割愛する（『女性学ゼミ』の実験(7)参照）。

ビデオについても、第Ⅰ部のゼミとほぼ同じであるが、一部変えているところがあるので、日程を紹介しておこう。

2年生・後期

10月7日(木) 「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

11月18日(木) 「オモシロ学問人生 男らしさにさようなら」

「男と女の境界線……その性を取りもどす時」

3年生・前期

4月19日(水) 「心の傷に寄り添う」

4月26日(水) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より

③ 10代の性体験36%

5月10日(水) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より

① 中絶経験43%

5月17日(水) 「真人君はなぜ死んだ」

5月24日(水) 「世紀を越えて・ウーマン・豊かな国の静かな革命」

5月31日(水) 「世紀を越えて・男と女・多様化する結婚のかたち」

6月14日(水) 「“世紀を越えて”を読む・男女の役割を越えて

・女性の社会進出が問いかけるもの」

6月21日(水) 「“くたばれ”に大反響・専業主婦論争第2弾」

(参考文献 石原里紗『ふざけるな専業主婦』)

- 6月28日(水) 「夫が突然殴り出す」
「妻を殴る夫」
- 7月5日(水) 「妻を殴る夫劇白・夫婦間暴力」
- 7月12日(水) 「シングル・マザー」
- 7月19日(水) 「声とざされて、そして……インドネシアの“慰安婦“たち」

次に、「演習1」と「演習2」において観賞したビデオの内容について、第Ⅰ部と異なるものについてのみ、簡単に紹介しておきたい。

「真人君はなぜ死んだ」は、民放の「ドキュメント'99」の特集番組である。義父から3年間暴力を受けて、ついに死亡した5歳の子どもの事件である。義父の暴力が許せないのはもちろんだが、母親がわが子への夫の暴力をとめず、第三者には暴力ではないと夫をかばったという事実がやるせない。また、虐待の事実を知りながら、3つの児童相談所の対応はあまりにも遅く、男の子を義父の暴力から救えなかったという、日本の現実が情けない。この番組では、虐待をした義父とはどのような人間であったのか、義父はなぜ子どもに暴力をふるったのかなどについて、詳しく取材をしているのが特徴である。

「シングル・マザー」は、海外のドキュメンタリー番組である。男性の精子が売買されている実態がリアルに描かれており、けっこうショッキングである。既にシングル・マザーになった人、これからシングル・マザーになろうとする人が何名も登場して、その思いを語る。ハイト・リポートで有名なハイト女史や、超保守的な立場の男性も登場し、シングル・マザーをめぐる議論が多彩に展開されている。

「声とざされて、そして……インドネシアの“慰安婦“たち」は、民放の「ドキュメント97」の特集である。朝鮮人慰安婦ばかりでなく、インドネシアにもたくさんの慰安婦が（オランダ人の慰安婦も）いた実態が、年老いた元慰安婦たちの証言によって明らかにされる。イスラム教の影響もあり、慰安婦の存在そのものが覆い隠され、元慰安婦たちは故郷にも帰れず、苦しい生活を続けてきた。ようやく声をあげ始めた元慰安婦たちであるが、日本は正式の謝罪と

賠償に応じようとはしていない。

Ⅱ. 学生による「女性学ゼミ」の評価

学生が「女性学ゼミ」をどのように評価しているのか、2000年7月にゼミ生5名を対象に、簡単なアンケート調査を実施した。回収できたのは5名分で、回収率は100%である。

アンケート項目は四つである。

一つは、「あなたは『女性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

二つ目は、「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思いますか？」という問いに対して、「役に立つと思う、役に立たないと思う、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点が役に立つと思いますか？」と問うものである。

三つ目は、「ゼミでは2冊のテキストをとりあげましたが、それぞれの感想を教えてください」というもので、とりあげた2冊のテキストそれぞれについて、感想を書くための自由回答欄を設けた。

サンプル数が少ないため、必ずしも正確な評価とは言えないが、「『女性学』を学んでよかったですか？」の問いに対しては、5名が「よかった」と回答している。具体的なよかった点について紹介すると、次のようなものである。

- ・「今まで考えていた『女らしさ』『男らしさ』というものが、社会の中でつくられたものであって、本来のものではないことを知った。今までの『女らしさ』『男らしさ』にとらわれない考えを持とうと思った。」
- ・「以前から、『女性学』『男性学』に興味をもっていました。ゼミで学んでいくうちに、自分が生活している中で、『女らしさ』『男らしさ』という意識が強くあることを実感しました。そして、今までおかしいと思っていたことや

気づかなかったことなどに対して、『女性学』『男性学』の視点から考えることができるようになりました。」

- ・「男女間に存在する意識（考え方、感じ方）の大きな偏りを学べた点がよかった。男性は従来の男女関係をどこかで当然と思っており、女性は被害者意識が強いように感じられた。日本人は固定化された男女関係に強く縛られている感があるが、今後、変化が目に見えてくるかは楽しみである。」
- ・「職場で、男女共同参画のことをよく耳にする。ゼミで学んだ『女性学』や『男性学』を活かせる機会があり、学んでよかったと思う。また、私自身の生き方を見つめ直すきっかけになった。」
- ・「社会の中での男性、女性の役割が身近にわかったように思えた。」

二つ目の「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思いますか？」の問いに対しては、4名が「役に立つと思う」と回答し、1名が「どちらともいえない」と回答している。まず、具体的な役に立つ点について紹介すると、次のようなものである。

- ・「公務員には昇級の面での差はないが、例えば、コピーやお茶は圧倒的に女性に頼むことが多い。こういった問題を改善していく場合には、考え方の一例として提示できると思う。」
- ・「これまでアルバイトなどで経験したことを、『女性学』の立場から考えられるようになったと同時に、『男性学』を学んだことで、今までと違う角度からも見るができるようになりました。」
- ・「実際にいろいろな問題に直面した時、『女性学』を学んだことを活かし、対処できるという自信が身についたと思う。また、自分の気持ちに正直に生きることも大切で、夢を現実のものに実らせることも可能だとわかった。」
- ・「家庭や社会での、女性の生き方や考え、女性に対応する問題に関心がもてた。」

次に、「どちらともいえない」と回答した理由を紹介する。

- ・「男性、女性の差別は、社会の意識が変わらないと、自分1人ではどうしようもないと思う。」

三つ目の「2冊のテキストの感想」については、次のとおりである。

①『女性学への招待』

- ・「初めて耳にする言葉もあって、少し難しく感じたところもありましたが、女性が今までにどのような性差別を受けてきたか、知ることができました。女性の人権の確立をめざすには、女性がするのが当たり前とされてきた家事など、固定的な性別役割分業意識を、女性も男性も変えていかなければならないのだと思いました。」
- ・「女性に生まれ、女性だから味わう経験を、一生を通して書いてある。もし自分がいろいろな問題に直面した時には、その選択を自ら判断できる知識をもつことができたと思う。さらに、『女性学』を学んだことで、自分らしく生きるヒントを得ることができた。」
- ・「世の中がいかにも『らしさ』にとらわれているか、性差別を受け入れているか、そういった事実がいろいろ書かれていて、それはそのとおりだと納得させられることが多かった。少しばかりマイナスにとらえすぎている感じもするが、今後、男女平等について考える時には、いろいろと役立てられそうである。『男は敵』みたいなところがなくなれば、男性ももっと近寄りやすくなるだろう。」
- ・「今まであたりまえと思っていたものが、女であるための差別だったのかと気づかされた。確かに言われてみればそうだけど、『それでいいのでは?』と思う点もあった。」
- ・「女性が社会で直面する問題、例えば、会社で女性は管理職になれないとか、男は外、女は内という慣習的な問題等、この本を通じて女性が今、直面して

いる問題を知ることは有益であった。」

②『男性学入門』

- ・「男性も『らしさ』の鎧に縛られているところがあって、その点での苦勞があるのだと知った。この『らしさ』を捨てることは、男性にとっては防御をはずすようなところもあるわけだから、抵抗も大きいだろう。作者のように、『らしさ』にとらわれることなく、家事を楽しんだりできるようになれば、男の人も精神面でずっと楽になると思う。」
- ・「『女性学への招待』に比べて、とても読みやすかったです。女性だけでなく、男性も見えない『男らしさ』という鎧を着て、息苦しい思いをしているのだということがよくわかりました。女性も男性もすべてを脱いで、男として、女としてではなく、1人の人間として生活して、その中で自分らしさというものを発見できればいいなと思いました。」
- ・「男にも、男なりの悩みがあることを知った。確かにそうだと共感することもあったが、今まで優位に立ってきた男性の自業自得だ、という思いもあった。」
- ・「家庭も社会も、男女一緒に、役割分担しながら生活すること（性別による固定的な役割分担にとらわれないこと）。

農業社会→工業社会→情報社会という社会の変化に、男性原理で運営されていた社会から、今日の社会においては、男性中心の力の強さは必要ないことだとわかった。」

- ・「男性の生き方、スタイル、父親論、父親業等、さまざまな角度から、この本を通じて、男性の生き方を深く知ることができた。」

アンケートの四つ目の質問である「印象に残っているビデオ」については、次のとおりである。

第1位（4名）「世紀を越えて・男と女・多様化する結婚のかたち」

第2位(3名) 「男と女の境界線……その性をとるもどす時」

第2位(3名) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より

③ 10代の性体験43%

第4位(2名) 「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

第4位(2名) 「真人君はなぜ死んだ」

第4位(2名) 「夫が突然殴り出す」

「妻を殴る夫」

第4位(2名) 「妻を殴る夫劇白・夫婦間暴力」

第4位(2名) 「シングル・マザー」

第9位(1名) 「“世紀を越えて”を読む・男女の役割を越えて・

女性の社会進出が問いかけるもの」

第9位(1名) 「“くたばれ”に大反響・専業主婦論争第2弾」

以下、順に、ビデオの感想を紹介しよう。

第1位(4名) 「世紀を越えて・男と女・多様化する結婚のかたち」

- ・「これからの社会制度の問題であり、どのように制度が変わっていくか楽しみ。今まで一通りしかなかった結婚が、多くの問題もあるだろうが、多様化したら、選択の自由があるので、よいのではと思う。」
- ・「外国では結婚に対する考え方、制度が進んでいる。同性愛者のPACS契約や、再婚者のステップ・ファミリーなどは、個としての生き方重視のような気がする。」
- ・「日本も離婚率が高くなってきているので、アメリカのステップ・ファミリーのような家庭が増えてくると思いますが、ビデオを見ていて、子供が犠牲になっている気がしました。」
- ・「現代は未婚の母親、晩婚化、少子化等、結婚も多様化しており、また、離婚も毎年顕著に数字が上がっている。」

第2位 (3名) 「男と女の境界線……その性を取りもどす時」

- ・「心は男だが体は女、もしくは、その逆で産まれてくる人がいる。心と体の不一致は辛く苦しいかもしれないけれども、彼らは男女どちらの立場にも立ち、男女間の問題を見ることができるのではと思う。『男も女も違わない』、こんな台詞も彼らが言うと、真実みも重みもあると思った。」
- ・「小説などで、自分は本当は女(男)だったのに、まちがえて男(女)に産まれたという人がよくでてくるが、実際にそういった人がいるということを知って、ショックを受けた。頭ではわかっているつもりだが、自分の近くにそういう人がいたら、自分がどのように受けとめるか、悩むかもしれない。」
- ・「このビデオでは、性同一性障害についてでした。彼・彼女たちの苦しみは、私にははかりしれないものだと思います。私たちが思っている男と女という固定的な性の意識が変わらなければ、彼・彼女たちの苦しみも決して消えないのではないだろうかと思いました。」

第2位 (3名) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より

③ 10代の性体験43%

- ・「10代の性体験が36%ということにあまり驚きはありませんが、日本では性教育が不十分だと思います。大人がきちんと教えなければ、性について正しい理解ができないままになってしまうのではないかと思います。」
- ・「10代の性体験36%、3人に1人の割合で若者が経験していることを知り、ショックを受ける。性教育を幼い頃から受ける必要があると思った。」
- ・「10代の性体験36%は驚くべき数字だと思う。これは援助交際、妊娠中絶等、社会全体が考える問題だと思う。」

第4位 (2名) 「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

- ・「男らしさ、女らしさというものに、どのくらい無意識のうちに縛られているのか、とてもわかりやすく理解できました。田嶋陽子さんと子供たちのやり取りもおもしろくて、印象に残っています。」
- ・「テレビでの放送をたまたま見ていたが、その時は外科医の話の回答（母親が外科医である）を思いつきもしなかったし、聞いても『ああ、そうか』程度でしかなかった。ゼミでもう一度見た時に、自分の中で男の仕事、女の仕事の区分が無意識にされていたんだと気づかされた。」

第4位（2名）「真人君はなぜ死んだ」

- ・「これは、正直に言って、腹が立つ以外に言葉がない。

まず、母親。父親はともかく、母親は実子がひどい目にあっているのに何もしない。自分の保身しか考えていない。夫を止められないなら、別れるなり、息子連れて逃げるなりするべきだと思う。必要以上に過保護なのも問題だが、必要最低限のことができないなら、子供を産むべきではない。

次に父親。いくら連れ子だといっても、なつかないからといっても、虐待としつけは違う。それがわからないなら、親になんかならないでほしい。

最後に、行政。児童相談所の対応は何だろうか。家を訪問もしないとか、何のために存在しているのかわからない。『事実関係が……』とか、『証拠が……』とか、それを調べるのも仕事だと思う。椅子にふんぞり返っていては、わかるものもわからない。しっかりしてほしい。」

- ・「自分は子供を産んだこと、育てたことがないので、はっきりとはわからないが、実際に自分が子供を産んだ時、本当に自分は子供に暴力をふるうことはないのか。自分の身近に同じような子がいて、助けを求めているのではないかと思ってしまった。」

第4位（2名）「夫が突然殴り出す」

「妻を殴る夫」

- ・「アメリカでは妻を殴る夫は逮捕されるという厳しい法律があるが、日本はまだ法整備がされていない。児童に対しては、先日、児童虐待防止法が制定されたが、夫婦間暴力に対してもこのような法の制定を望みたい。」
- ・「集団の中では対等な地位にあるが、一個人として男女は対等な関係を保てるのか。大人ならば問題がおきた時、逃げずにむきあうことが大切である。」

第4位（2名）「妻を殴る夫劇白・夫婦間暴力」

- ・「加害者と被害者の意識の違いがはっきりするものだった。意識の違いは私にも経験のあることなので、あまり強くは言えないけれど、相手の骨を折ったりしておきながら、『そんなことしたっけ?』な感じには驚いた。また、そんな目にあっても一緒に暮らしたがる妻も信じられない。(そして、どうしても思うこと、ケンカと暴力・イジメは別物だと警察も理解してほしい)」
- ・「夫婦間暴力は男性が身勝手に男らしさにとらわれて、対等な大人のつきあいができずに、優位な地位を得るための行為。女性は世間体にとらわれず、行動をおこそう。」

第4位（2名）「シングル・マザー」

- ・「両親がそろっているから子供が幸せとは限らないので、シングル・マザーについては悪いことだとは思いません。しかし、精子バンクで精子を買って、子供を出産することに対しては、抵抗があります。自分のことだけではなく、もっと子供の気持ちについて考えてみたほうがいいのではないか、と思いました。」
- ・「人それぞれ思うところがあって、シングル・マザーの道を選んだりもするのだから、そのことを悪く言うつもりはないけれど、精子や卵子の売買だけは受け入れられない。」

NHKの朝の連続テレビ小説で、健人をその父がなぐさめる父子愛の様子

を主人公のなずなが見ながら、息子の太陽は父親のこんな愛情を知らずにこの先育つのかと考える場面があったが、父の愛と母の愛はやはり形が違うと思うので、子供にとっては二人親がよいと思う。」

第9位（1名）「“世紀を越えて”を読む・男女の役割を越えて・

女性の社会進出が問いかけるもの」

- ・「男性は女性に比べ性的未熟であり、正しい情報を得ずに身体だけ成長し、男女関係の知識が身についていない。」

第9位（1名）「“くたばれ”に大反響・専業主婦論争第2弾」

- ・「自分の母親が専業主婦なので、家に帰った時、家にだれもいない家の子はかわいそうだと思っていた。確かに税の控除や年金など、金銭的な問題もあるだろうが、主婦を社会のゴミと決めつけるのはどうかと思う。女同士の言い争いはすごかった。」

おわりに

「はじめに」でも述べたように、第Ⅱ部の「女性学ゼミ」では、第Ⅰ部と同様、2年生後期の「演習1」は従来どおり『女性学への招待』と『男性学入門』の2冊を読むことによって、「女性学」と「男性学」の基本を学んだ上で、3年生前期の「演習2」は視覚的でイメージがつかみやすい「ビデオで女性学」を試みた。ビデオ学習では、子育てや児童虐待の問題、夫婦間暴力の問題、専業主婦の問題、男女の性の問題など、「女性学」と「男性学」に関わるさまざまな問題を取りあげることができた。

つまり、「女性学」と「男性学」の基本文献を学びつつ、さまざまな問題をビデオで学んで討論で深めるということ、ある程度は実現できたように思う。

そして、アンケート結果を見ていただければわかりいただけるかと思うが、

「女性学ゼミ」の目的である「女らしさ」「男らしさ」についての刷り込まれた固定観念を突き崩すということには、まあ成功したようである。また、第Ⅱ部には社会人としての労働経験がある学生が多いので、第Ⅰ部の学生のアンケート結果と微妙に違うところにも気づかれるかと思う。

今後の課題は、この「女性学ゼミ」で学んだことを卒業論文として結実させることである。そして、彼と彼女たちが「女性学」と「男性学」をさらに深めることにより、社会人としての人生を主体的に選択し、しなやかにかつしたたかに生きぬくことを、強く希望するものである。